弟子たちの訓練

会期 2: 弟子訓練とは何か?(2a)

ロン・ライブリー、M.Div.、M.A.による提供 – BiblicalMentoring.org(学問)

ステップ1: 開会の祈り

ステップ2: それぞれが記憶の節を引用します: **ルカによる福音書 9:23-24**

23 そして彼は皆に言った、「もし誰かが私を追いかけてくるなら、
彼が自分自身を否定し、毎日十字架を背負い、私に従うことを許してください。
24 命を救おうとする者は、命を失うだろう、
でも、私のために命を落とす者は 救うよ。

ステップ3: *聖書の章を読んで議論してください – **ルカ 9***

ステップ4: 個人申請やグループディスカッションのための質問:

一. ソクラテスやプラトンから弟子訓練について何を学べるでしょうか?

二. 弟子訓練の二つの本質的な要素は何ですか?

三. クリスチャンの歩みのどの時点で弟子になるのでしょうか?

四. 神の救いの賜物を弟子であること、すなわち弟子作りであることと切り離すことは決してできないことを論じてください。

ステップ5: *本の内容を読んで議論してください:*

著者による第2a章 キース・フィリップス:

ギリシャの黄金時代、若きプラトンは師匠であるみすぼらしく裸足で聡明なソクラテスを追いかけてアテネの街を歩いている姿が見られた。ここで、おそらく弟子訓練の始まりだった。ソクラテスは本を書かなかった。彼の弟子たちは彼の話す一言一句に熱心に耳を傾け、他者を教える準備として彼の行動すべてを見守っていた。どうやらこのシステムは機能していたようだ。プラトンは後にアカデミーを創設し、そこで900年間哲学と科学が教え続けられた。

イエスは、神の国を広めるために、自分が訓練した人々との同様の関係を用いました。弟子たちは3年間、昼夜を問わずイエスと共にいました。彼らはイエス様の説教を聞き、教えを暗記しました。彼らはイエスが教えられた人生を生きる様子を見ました。そして、イエスが昇天された後、弟子たちはキリストの言葉を他の者に託し、彼らにキリストの生き方を受け入れ、教えに従うよう励ました。弟子とは、他者に教えるために、師の言葉や行動、生活様式を暗記する生徒のことです。

キリスト教の弟子訓練とは、キリストとその弟子たちのモデルに基づく教師と弟子の関係であり、教師がキリストにある満ちた人生を生徒の中に非常によく再現し、生徒が他者を教えるために訓練できる状態です。

キリストの教えと生涯を注意深く研究すると、弟子制度には二つの本質的な要素があることがわかります。それは自己死と子孫です。それらはイエスの全奉仕の基論です。彼は新しい命を生むために死んだのです。そして、弟子一人ひとりに彼の模範に従うことを求めています。

自ら死

キリストの弟子としての召命は、自己死への召命であり、神への絶対的な降伏です。イエスは言われました。「...もし誰かがわたしの後を追いたいなら、自分を否定し、日々十字架を背負い、わたしに従いなさい。命を救おうとする者はそれを失うが、わたしのために命を失う者は、その命を救う者である」(ルカ 9:23,24)。

世界の視点から見ると、キリストが人々に従うよう率直に呼びかけるのは極端に見えます。今日、もし誰かがそのような要求の厳しいライフスタイル、全てを飲み込むような献身を「売りたい」なら、おそらくマディソン・アベニューの最も洗練された事務所に依頼し、その決断の栄光ある利益をフルカラーのパンフレットで綿密に説明してもらうでしょう。あるいは最も華やかな女優を雇い、彼女の周りに「美しい人々」を囲み、新しいキリストにおける生活の満足と喜びを明らかに楽しんでいるのです。そしてその瞬間の魔法をビデオテープで捉え、できれば「マンデーナイトフットボール」のハーフタイムに放送されることを願っています。

しかしイエスは正直で率直です。彼の栄光を分かち合うためには、まず彼の死を分かち合わなければなりません。

イエスは諸主の主であり、万王の王です。そして宇宙の主はすべての人に彼に従うよう命じています。イエスがペテロとアンドレ(マタイ4:18-19)、ヤコブとヨハネ(マタイ4:21)に呼びかけたのは命令でした。「ついて来なさい」は常に命令であり、決して招待ではありませんでした(ヨハネ1:43)。

イエスは誰かに自分に従うよう懇願したことはありません。彼は恥ずかしいほど率直でした。彼は井戸辺の女性に姦淫を、ニコデモに知的な誇りを、パリサイ人を自己義認で対峙しました。誰も「...悔い改めなさい、天の御国が近いから」と懇願と解釈することはできません(マタイ4:17)。イエスは一人ひとりに自己中心的な追求を捨て、罪を捨て、完全に神に従うよう命じました。

裕福な若い支配者がすべてを売って彼に従うことを拒んだとき(マタイ19:21)、イエスは妥協交渉を試みて追いかけることはなかった。彼は決してその旗を薄めなかった。イエスはただ言った、「わたしに仕える者は誰でもわたしに従うべきだ...」(ヨハネ12:26 NIV)

イエスは即時の従順を期待していました。言い訳は一切受け入れませんでした(ルカ 9:62)。ある人が最初にキリストに従う前に父を葬りたいと思ったとき、イエスは言われました。「わたしに従いなさい。死者は死者を埋葬させなさい」(マタイ8:22 KJV)。キリストの命令に従い、弟子となることで称賛されることはなかった。それは期待されていた。イエスは言った。「だから、あなたも命じられたすべてのことを行ったとき、言いなさい。『我らはふさわしくない奴隷である。』」「我々はすべきことを行っただけだ」(ルカ17:10)。

では、いつキリスト教徒、キリストの弟子になるのでしょうか?バージンロードを歩くとき?祭壇の前でひざまずいたときですか?心から涙を流したときですか?必ずしもそうとは限りません。キリストの最初の信者たちは、彼に従い、「すぐに船と父を離れて彼に従いた」(マタイ4:22)ときに弟子となりました。[1]

キリストの命令「わたしに従いなさい」に従うことは自己死に至ります。自己死のないキリスト教は抽象的な哲学に過ぎません。それはキリストのないキリスト教です。

多くのキリスト者が犯す最も根本的な誤りは、救いを受けることと弟子であることを分けて考えていることかもしれません。彼らは、イエスの「十字架を背負い」「イエスに従う」といったより急進的な要求(マタイ10:38)に身を委ねることなく、救われることが受け入れられると、キリスト教的成熟度のレベルを異なるレベルに置いています。

この前提は、救いは主に人間の利益のためであり、彼を幸せにし永遠の破滅を防ぐためであるという誤った信念に基づいています。 (15-18aページ)

ステップ6: *最後に、個人的な祈りの願いと、それぞれが他の祈りのために祈っていることを共有します。*

出典:キース・フィリップス博士著『The Making of a Disciple』。フレミング・H・レヴェル社出版、1981年。ISBN 0-8007-1181-5。ロバート・E・コールマンによる序文。内容(勉強問題を除く)は本書から抜粋し、改訂は加えていない。

改訂20261011